ザレバ、爐邊ヲ去テ業ヲ成得ズ、山川村里ノ雪消ザルノ間ハ、其境界モ分チ難ク、積雪勁寒ニ制セラレテ、人ト物ト相アハレムベキモノナリ、毎歳暮春初夏ニ至ラザレバ、春ノ花開ケズ、其開ケルニ及デハ、梅桃櫻ノ次第モナク、皆盛ヲ一時ニセリ、盛夏バカリハ、暑氣至ツテ其代謝ハ見ユレドモ、旦暮冷カニ爽ナルコト餘國ニ異リ、秋冷ノ至ル又早シ、自次序ヲ逐テ業ヲナス間ハ、他州ノ三季ニモ比スベカラズ、習テ性ト成ル故ニ、業ヲ勵ムニ疎懶ナリ、是氣候不順ナルニ制セラルヽ所以乎、○中略

凡商賈ハ、合國第一ノ業トセリ、然ルニ中頃材品時メキシニヨリ、諸國ノ商人數多此國ニ入、一時ニ諸材ヲ伐出セシカバ、サナガラ列嶽攢峯ヲ赭ニセントス、爰ニ於テヲノヅカラ俗風一變シ、生民其利ニ趨リテ、身上ノ榮枯地ヲ易ヘタリ、既ニシテ其事モ停ケルハ、在山ノ年數ニ制限アリ、殊ニハ國民永世ノタツキト成セシ材品モ、此時ニ至ツテ悉ク盡ナントスルニ始テ驚キ、是ヲ歎キ訴レバナリ、今ノ如キハ、山中ノ民ノミ材ヲ業トス、租稅ニ充ル田畠少キガ故ナリ、

〔閑窓瑣談下編乾〕飛驒國大牧村の籠渡し

彼阿部友の進の採藥記に記されしを見れば、其地の人物さへ眼前に見るごとく、最も便なき所ぞかし、飛驒國田畑村といふ所の外は少き深山なり、雪深く六七月迄も村々に雪あり、極暑の節も朝夕は綿入を著す、甚しき寒國なり、稻を植て實の惡しき故、田に稗を作る、常々農民の食物は、蕨の根を堀て食とす、又栗の木杯のやどり木を採て、其汁を煎じ食す、友之進此山中に旅宿し、夜中蠟燭を燈し髮月代を召仕の者に致させけるが、其所の男女是を見て、甚奇怪の事と思へる有樣にて、あれは大根に火を燈し、頭を面にするかといふて甚しく笑ふ、

撰者曰、此頃猶此邊にて世に蠟燭の有事を知らずり、月代をする事も知らざりけん、又蠟燭をも看たる事のなかりけん、大根へ火をともしたるかとは云しなるべし、今○天保よりは百年以前